

第43回定期演奏会

水星 交響 楽団

G U S T A V

M A H L E R

Symphonie No. 3

グスタフ・マーラー

交響曲第3番

指揮 齊藤 栄一

アルト独唱：小川明子
オルフ祝祭合唱団
すみだ少年少女合唱団

2010年5月1日[土] 18:00開演
東京文化会館大ホール



ご挨拶

本日はお忙しい中、私ども水星交響楽団（略称：水響）の演奏会にご来場いただき、誠にありがとうございます。

今回のプログラムは、グスタフ・マーラーの交響曲第3番です。皆さまご存知と思われますが、今年2010年はマーラー生誕150年目です。従来よりマーラーを重点的に取り上げてきた水響ですので、これはやらねばなるまいという雰囲気は、当然のように2～3年くらいから決定事項のようになっておりました。では何をやるかということになり、団内でアンケートをとったところ、意外にも票が割れることなく、今回の3番がすんなりと決まりました。

マーラーには思い入れの深い団員が多数いる中で、なぜ3番がこれほどの総意を得られたのか考えてみたのですが、今回が、5月初旬かつ東京文化会館での演奏会ということが実は大きなファクターだったように感じます。

この交響曲は、当初、「夏の夜の夢」という副題がつけられており、下記にある彼の言葉どおり、世の森羅万象を全て網羅した内容を持つものです。

「僕のこの交響曲は、世界がまだかつて耳にしたことのないようなものだ。そこでは自然界全体が一つの声を得て、人が夢の中で予感することしかできないほどの奥深い秘密を物語るのだ」

東京文化会館のステージは水響にとっても初めてなのですが、新緑に萌える上野公園にある「クラシックの殿堂」で、この自然への愛に満ちた交響曲を演奏することは、水響にとっても必然だったのかもしれませんが、6つの楽章を持ち、全曲の演奏時間は約100分を超えますが、内容は実にマーラーらしく多彩多様であり、気がつけば曲が終わっていたとお感じいただければ幸いです。ぜひ、ごゆっくりお聴き下さい。



水星交響楽団運営委員長
植松 隆治



水星交響楽団

1984年、一橋大学管弦楽団出身者を中心に結成。マーラーはもちろん、バーンスタイン、ラヴェル、ウォルトン、ベートーヴェンなど時代を超えた名曲の熱気あふれる演奏で聴衆の感動を誘う。

2008年の40回記念定期では愛知県芸術劇場とすみだトリフォニーホールで「春の祭典」「新世界」を披露。昨年25周年を迎え、常任指揮者・齊藤氏が選曲した「家庭交響曲」などを特別プログラムとして演奏した。





齊藤 栄一 (さいとう えいいち) 指揮

京都大学にて音楽学を、国際基督教大学大学院にて美術史学を研究。この間、指揮法を尾高忠明、田中一嘉、円光寺雅彦の各氏に師事。1981年には京都大学交響楽団と2週間に渡り、ドイツ、オーストリアにて演奏旅行を行い、ザルツブルグ音楽祭などにて指揮。'82年には関西二期会室内オペラ・シリーズ第9回公演、ブリテン作曲「ねじの回転」(関西初演)の副指揮者を務める。

1984年に水星交響楽団の常任指揮者に就任。水星交響楽団、オルフ祝祭合唱団との共催で、佐多達枝振り付けのバレエ「カルミナ・ブラーナ」('95年、東京文化会館)、「ダフニスとクロエ」('99年、新宿文化センター)を指揮した。その後、「カルミナ・ブラーナ」のバレエ公演では、神奈川フィル、東京シティ・フィルも指揮した。2005年には、同曲を含むオルフの「トリオンフィ」3部作(4台のピアノと打楽器)を指揮している。

明治学院大学文学部芸術学科教授。また、著書に「往還する視線 14 - 17世紀ヨーロッパ絵画における視線の現象学」(近代文芸社)、「振っても書いてもしよせん酔狂」(水響興満新報社)がある。



小川 明子 (おがわ あきこ) アルト独唱

東京芸術大学卒業、同大学院音楽研究科独唱専攻修了。文化庁オペラ研修所第10期修了。

高橋啓三、渡邊高之助、戸田敏子、毛利準の諸氏に師事。1992年第61回日本音楽コンクール声楽部門第2位入賞。第4回日本声楽コンクール第3位入賞。1993年第4回奏楽堂日本歌曲コンクール第1位、ならびに山田耕筰賞受賞。

1997年11月より文化庁派遣芸術家在外研修員として1年間ウィーンに留学、アデーレ・ハース氏に師事。オペラではモーツァルト『ドン・ジョヴァンニ』、『魔笛』、ワーグナー『さまよえるオランダ人』、フンパーディンク『ヘンゼルとグレーテル』などに出演。またヘンデル『メサイア』、バッハ『マタイ受難曲』、『ヨハネ受難曲』、『クリスマスオラトリオ』、『口短調ミサ曲』、モーツァルト『レクイエム』等の宗教曲やベートーヴェン『交響曲第9番』、マーラー『復活』で多くの合唱団と共演。リゲティ『レクイエム』、シェーンベルク『4つの歌曲』などの現代曲も得意としている。二期会会員。

2003年にCD「日本歌曲選」、2006年に「啄木とみずゞを歌う」、2008「からたちの花 山田耕筰歌曲集」(ピアノ/山田啓明)をリリース。2010年4月25日に「荒城の月 国楽を離陸させた偉人たち」(ナミ・レコード)を発表した。



オルフ祝祭合唱団

オルフ祝祭合唱団は、オーケストラ、ダンサー、独唱者と合唱によるエンターテインメント“合唱舞踊劇”を創造するカンパニー“O.F.C.”の専属合唱団。O.F.C.は合唱を群舞として使う独特の手法が大きな特徴となっている。1995年の発足以来、創作バレエ界の第一人者として名高いコレオグラファー佐多達枝を芸術監督に、劇的三部作『トリオンフィ』（オルフ作曲：「カルミナ・ブラーナ」、「カトゥーリ・カルミナ」、「アフロディーテの勝利」）、『ルードヴィヒ』（ベートーヴェン作曲：「交響曲第9番」）、『ダフニスとクロエ』（ラヴェル作曲）、『イエス、わが喜び』（バッハ作曲：「モテット3番」）、『ヨハネ受難曲』（バッハ作曲）などを合唱舞踊劇として上演。今後、2011年3月29日に『カルミナ・ブラーナ』、2011年10月1日2日に『ヨハネ受難曲』の上演を予定している。

合唱指揮 小野 真実子（おのみまこ）

洗足学園音楽大学声楽科卒業。同学内コンクール奨励賞受賞。

4歳よりピアノ、14歳より声楽を始める。声楽を本多悦子、柳澤涼子、浦野智行の各氏に師事。ソプラノとして様々な演奏会においてソリストやアンサンブルメンバーとして活躍。また、指導者として、“カンタービレ音楽教室”や“石川雅子ミュージックアカデミー”など音楽教室でピアノと声楽を教えるほか、“オルフ祝祭合唱団”、“合唱団ジョイア”、“千歳中学校・つきみ野中学校合唱部”の合唱指導、“女声合唱ムッターレーベ”の伴奏ピアニストとしても活躍中。

すみだ少年少女合唱団

すみだ少年少女合唱団は、合唱をとおして豊かな人間性を育み、音楽性を啓発するため、墨田区教育委員会により昭和60年に結成された。団員は、より美しい合唱の創造という目標に向かって、相互のつながりを大切に、それぞれの役割を自覚しつつ、練習に取り組んでいる。

その成果として今日まで、定期演奏会、区内のイベントをはじめとし、府中の森芸術劇場での全日本ジュニアコーラス・フェスティバル、東京文化会館大ホールでのソフィア少年少女合唱団との国際交流コンサートや、オーチャードホールでの「トゥーランドット」、すみだトリフォニーホールでの「トスカ」などオペラへの出演、また、東京国際フォーラム記念演奏会での演奏、トリフォニー開場に伴う新日本フィルの歓迎ガラコンサート、墨田区制50周年記念コンサートや井上道義指揮「森の歌」に出演など、さまざまな舞台に立つことができた。これらの演奏会出演の機会をとおし、歌うことの楽しさ、そして難しさ・奥深さを知ると共に、団員相互の絆の深さを感じた。

昨年度は、東京アカデミッシュカペレやオーケストラ・ニッポニカなど管弦楽団との共演を数多く経験することができたほか、平成8年3月にすみだ少年少女合唱団創立10周年を記念して初演された合唱組曲「展覧会の絵」に久々に取り組むなど、実りの多い1年となった。

現在、団員は小学校3年生から高校3年生まで約80人。甲田潤氏、弓田真理子氏、荒井滋美氏による指導と保護者会の支援を受けながら、年間55回の練習や6～7回程度の演奏活動を行っている。

合唱指導 甲田 潤（こうだ じゅん）

東京音楽大学作曲科卒業。同大学研究科修了。

作曲を伊福部昭、有馬礼子、池野成、川井學、松村禎三の諸氏に、指揮法を三石精一氏に師事。

主な作品に「管弦楽のための抒情断章」「ピアノと弦楽四重奏のための三章」「『紫苑』～尺八と琵琶のために～」「シタール、タブラ、タンブーラ、打楽器、箏と十七絃のためのSAMAAE（時）」「芝増上寺、縁山流声明と絃楽のための『四智讃』『錫杖』」「真言声明と箏・十七絃による『対揚』」「女声合唱とピアノのための“CIS SINOT CA”（チシ・シノツ・チャ）『涙の歌』」等がある。

また出版された楽譜には「ピアノのための『変容』」「フルート・25絃箏とマリンバのためのラプソディー」（日本作曲家協議会）、編曲として女声合唱組曲「展覧会の絵」（ムソルグスキー作曲、全音楽譜出版社）、女声合唱組曲「カムイの森で」（廣瀬量平作曲、カワイ出版）等がある。他に「熱中時代スペシャル」「火曜サスペンス」等のTV音楽、劇団「東俳」「ステージ・ドア」「project ON THE ROCKS」等、芝居の音楽も担当した。

合唱指揮者としては、特に2004年5月、サントリー・ホールで行われた「伊福部昭寿寿記念コンサート」で、師の大曲「交響頌偈『釋迦』」の演奏に参加し高評を得た。

日本作曲家協議会、日本現代音楽協議会各会員。「アプサラス」理事。東京音楽大学民族音楽研究所専任研究員、同大学付属高等学校兼担講師。

鑑賞ガイド

マラー
交響曲第3番Gustav Mahler
Symphonie Nr. 3

耳で! 目で! 楽しもう!! マラ3のすべて

1. 巨大編成! 舞台上に200名超!

開演のブザーが鳴り、ステージに演奏者が入場してくると、その数のおびただしさにお客様は度肝を抜かれるのではないのでしょうか。

それもそのはず、本日のステージには、最初はオーケストラ約110名、曲の後半からアルト独唱、女声合唱約40名、児童合唱約60名が加わり、指揮者も含め合計約210名にものぼる人数がひしめくのです。

合唱の人数は指定がないため、多ければそれだけ壮観ということもありますが、特筆すべきはオーケストラの大きさです。ベートーヴェンの交響曲第5番『運命』と、『マラ3』の編成を比較してみました(右表)。『マラ3』のオーケストレーションの巨大さがおわかりいただけだと思います。

遠いところに置いた小太鼓、遠いところで吹くポストホルン(郵便ラッパ)というのがあります。つまりステージ以外の場所も活用するわけです。これらがどこで演奏することになるのか、本稿執筆時点でまだ決まっていません。小太鼓は第1楽章の途中、ポストホルンは第3楽章の途中で出てくるので、どこから聞こえてくるか、楽しみにしてみてください。

2. ギネスにも登録! 空前の長さ!

全6楽章、所要時間は約1時間45分。世界最長の交響曲としてギネスブックに登録されていたこともあったそうです。

次の表で、各楽章のアウトラインを眺めておきましょう。参考に「ひとことで言ってどんな音楽か」

分類	『運命』	『マラ3』
木管楽器	フルート2 ピッコロ1	フルート4(全員がピッコロと持ち替え)
	オーボエ2	オーボエ4(1人はイングリッシュ・ホルンと持ち替え)
	クラリネット2	クラリネット3(1人はバスクラリネットと持ち替え) E♭クラリネット2(1人はクラリネットと持ち替え)
	ファゴット2 コントラファゴット1	ファゴット4(1人はコントラファゴットと持ち替え)
金管楽器	ホルン2	ホルン8
	トランペット2	トランペット4
	トロンボーン3	トロンボーン4
	—	チューバ1
打楽器	ティンパニ1対(2台)	ティンパニ2対(8台) 鉄琴 タンバリン トライアングル シンバル 小太鼓 大太鼓 シンバル付き大太鼓 むち どら 鐘
弦楽器	弦五部(ヴァイオリンI・II、ヴィオラ、チェロ、コントラバス)	弦五部(同左(ただし管楽器の数相応に多数))
	—	ハープ2
その他	—	遠いところに置いた小太鼓 遠いところで吹くポストホルン
合唱ソリスト	—	アルト独唱 女声合唱 児童合唱

を添えました。聴いておそらく受けるであろう単純な印象であって、あとで述べるこの曲の標題性とは関係ありません。

なお、第4楽章と第5楽章には独唱や合唱が入り、曲に新たな色合いを添えますが、規模も小さく、第6楽章へ続けて演奏されることから、これらを一種の

間奏曲とみることでもできるでしょう。すると、この交響曲は、並外れて長大であるとはいっても、伝統的な4楽章構成の交響曲と捉えられなくもありません。もっとも、中間2楽章にメヌエットやスケルツォ

といった速めの曲を置き、最終楽章にゆっくりの曲を置く例は少なく、チャイコフスキーの交響曲第6番『悲愴』、そして同じマーラーの交響曲第9番がよく知られているくらいですが。

楽章	表情指示 (楽譜の最初に書いてある)		演奏	時間	ひとこと印象	
第1楽章	Kräftig. Entschieden.	力強く。決然と。	オケのみ	約35分	豪壮で長大	
第2楽章	Tempo di Menuetto. Sehr mäßig. Ja nicht eilen!	メヌエットのテンポで。きわめて中庸に。急がないで!	オケのみ	約10分	チャーミング	
第3楽章	Comodo. Scherzando. Ohne Hast.	気楽に。おどけた感じで。急がないで。	オケのみ	約20分	生命の胎動	
(アルト独唱、女声合唱、児童合唱が入場)						
第4楽章	Sehr langsam. Misterioso. Durchaus PPP.	非常にゆっくりと。神秘的に。一貫して最弱音で。	+アルト独唱	約10分	続けて演奏	深遠で厳か
第5楽章	Lustig im Tempo und keck im Ausdruck.	テンポは快活に、表現は大胆に。	+アルト独唱 女性・児童合唱	約5分		クリスマス?
第6楽章	Langsam. Ruhevoll. Empfunden.	ゆっくりと。安らぎに満ちて。感情を込めて。	オケのみ	約25分		…泣けます

3. 「自然＝森羅万象」を描いた音楽

この交響曲についてのマーラーのコメント(手紙や発言など)がいくつか残っています。

私の交響曲は、世界がいまだかつて聴いたことのないようなものになるでしょう。そこでは、「自然」がみずからの声を得て、人間は夢の中でしか感じられないような、奥深い秘密を物語るので。

「もう眺めるには及ばないよ。あれらは全部曲にしまったからね」(ブルーノ・ワルターが、作曲中のマーラーに招待されてアッター湖^{*1}を訪れたとき、ワルターがその景観に感嘆していると、マーラーはワルターに向かって)

「自然」が、戦慄すべきもの、偉大なもの、そしてまた愛らしいものすべてを、自らのうちに秘めていることについて、誰も気がついていません。私は、この誰も気がついていないことを、作品全体の中で、ある種の進化論的發展の形で表現しようとした。

ほとんどの人は、「自然」というと、いつも花とか、小鳥とか、森の息吹といったことしか思い描きませんが、これは私にとって奇妙なように思われます。ディオニュソス^{*2}や牧神^{*3}のことを誰も気にかけないで。

このように言えば、もうある種の標題が、つまり私がどのように音楽をつくるのかが、示されたも同然でしょう。

『マラ3』は自然をテーマとしていることが、これらからわかります。しかしそればかりではなく、マーラーはそれらを創造した根源的なものにまで思い

を馳せたということもわかります。単なる自然を超え、森羅万象を描いたと言ってもよく、また世界そのもの、宇宙そのものを描いたと言ってもよいかもしれません。

マーラーは、『マラ3』の構想段階において、各楽章の性格を表す標題をつけていました。これを見ると、上のコメントにある「進化論的發展」とは何なのか理解できる気がします(最終的には、絶対音楽である「交響曲」として、これらの標題は破棄して出版されました)。

- | | | |
|-----|------|---------------------------|
| 第1部 | 第1楽章 | 牧神が目覚める、夏が行進してくる(バックスの行進) |
| 第2部 | 第2楽章 | 草原の花々が私に語ること |
| | 第3楽章 | 森の動物たちが私に語ること |
| | 第4楽章 | 人間が私に語ること |
| | 第5楽章 | 天使が私に語ること |
| | 第6楽章 | 愛が私に語ること |

進化論的發展

4. これが『マラ3』の聴きどころだ!

曲の展開を順を追ってまとめました(次表)。「交響曲」として独立したのに、いまだに標題性にこだわるのはマーラーの本意ではないでしょうが、ここではあえて、上の標題に沿って想像を膨らませながら、目立つ楽器や表現を中心に記すことにします。目印になる注目楽器に下線を引いておきました。「盛り上がり度」「ぐっとくる度」(ともに5段階評価)は筆者の主観にすぎませんので、参考程度にご覧ください。



楽章	聴きどころ	盛り上がり度	ぐっとくる度	累計時間(分)
第1楽章 牧神が目覚める	1. ホルン全員による勇壮な幕開け。大太鼓、低音金管、ファゴットの重々しいリズムに乗って、低弦が荒々しい動き。トランペットの痛切なファンファーレ。ホルンの咆哮。夜明け前、人気を寄せつけず屹立するアルプス山脈か。	3	4	0-
	2. 木管のコラールに乗って、オーボエの美しい歌。クラリネットがベルアップですっとんきように乱入。太陽がやわらかに草原を照らし、牧神が目覚めた。	2	3	5-
	3. トロンボーン ^の の重く、長大なソロ。最後の方でトロンボーン四重奏になり、壮麗にカッコよく決める。	3	4	7-
	4. 2と同じ木管のコラールのあと、チェロに始まる静かな行進曲。次第に盛り上がっていき、その頂点で再びホルンが咆哮、トランペットの苦しそうな嘆きの声。パカスがゆっくりと近づいてきて、アルプスに対峙した。	5	4	10-
	5. 木管のコラールに導かれ、ホルン、ヴァイオリンソロ、木管、ハーブが絡み合う。この曲随一の優しい場面。	2	5	19-
	6. 低弦から始まる、かなり粗野な行進曲。金管の荒々しいあと打ち、木管の金切り声が続いて(フルートはここで全員がピッコロに持ち替える)、またまた盛り上がっていく。やがて弦楽器が嵐のようにうねり出し、行進曲はカオスに突入。とうとうパカスが暴れだした。牧神も逃げ惑うばかり。	5	4	21-
	7. 突如、遠いところから、小太鼓がまったく関係ないテンポで軍隊マーチを叩きだす。1のホルンが戻ってくる。	3	3	25-
	8. 4と同じ行進曲。しかし今度は決して取り乱すことなく、ひたすら健康的に盛り上がっていく。アルプスと牧神とパカスが手をとり合って、調和のとれた偉大なる自然がここに完成。	5	5	30-35
第2楽章 草原の花々が私に語る	1. オーボエの愛らしいメロディ。ヴァイオリンのせつない調べ。草原に咲く花々が風に揺れる。	1	4	0-
	2. 短調に変わり、リズムが細かくなる。少し風が強くなってきたようだ。さらにヴァイオリンの表情もせわしくなり、雲行きまでも怪しくなる。	2	3	2-
	3. 1、2が繰り返される。ただし、オーケストレーションがかなり複雑になっている。同じ箇所でも楽器によって表情が全然違っており、その変化と多様さが見もの(聴きもの)。	2	3	3-
	4. 何事もなかったかのように1が戻る。繊細で即興的な動きを見せるヴァイオリンの調べが聴きもの。花々の動きが次第に力を失い、ソロヴァイオリンの印象的な上行旋律でなにげなく終わる。	1	4	7-10
第3楽章 森の動物たちが私に語る	1. 鳥たちの鳴き声が、クラリネット、ピッコロ、オーボエ、E♭クラリネット、フルートの順で横写される。続くヴァイオリンは森のざわめきか。	2	3	0-
	2. 音量が上がって、獣たちの楽しい歌。弦、木管、ホルンが朗らかに歌う。	3	3	2-
	3. 1が戻るが、表情がやや険しくなり、オケも分厚くなってホルンが咆哮する。金管と中低弦による半音下降が印象的。	4	4	3-
	4. 再び1がフルートに戻る。E♭クラリネットによって「あつかましく」と指定された新しいメロディが吹かれる。ピッコロが鳥の声を模すと…	2	3	5-
	5. 遠いところから、ポストホルンがどこか懐かしい歌を歌う。フルートによる合いの手をさみながら3回繰り返されるが、2回め、3回めにはリストの「スペイン狂詩曲」(ピアノ曲)とよく似た節が現れるのは意外。	1	3	7-
	6. 唐突な信号ラッパに導かれ、鳥と獣がいっせいにうごめき出す。次第に動きが大きくなり、森は大騒ぎ。3の半音下降に続くホルンは、荒々しくも楽しげ。やがて森の神様の存在でも感じたのか、鳥(木管)がけたたましく奇声をあげると、騒ぎは急速に委える。	4	4	12-
	7. ポストホルンが名残惜しそうに歌うと、再び高潮し、その頂点でビッグバンのような和音の爆発。森の神様の登場?	5	3	15-
	8. ティンパニの三連符に乗ってテンポを上げ、動物たちが再び活気を取り戻す。主和音の第3音が半音上下しながら交互に現れ、最後には抜けてしまい、長調とも短調ともつかない不思議な響きで終わる。	5	4	18-20
第4楽章 愛が私に語る	別掲の歌詞と訳文を参照。 アルト独唱が入る。オケとしては、ホルンとヴァイオリンの息の長いかけ合い、オーボエの嘆き節などが印象的。	1	4	0-10
第5楽章 人間が私に語る	別掲の歌詞と訳文を参照。アルト独唱に加え、女声合唱と児童合唱が入る。オケとしては、教会の鐘が終始鳴り響くこと、管楽器の楽しく混じり気のない響きが印象的。なお、この楽章は、通常他のどの楽器よりも忙しいヴァイオリンが、まったく出番がない。ほっと一息ついているヴァイオリン奏者の表情にも要注目だ。	3	4	0-5
第6楽章 天使が私に語る	1. ヴァイオリンが厳粛な、しかし温かい旋律を歌いだす。沈黙を破り、万感の思いを込めて弾き出される弦の豊かな響きに、ぞくっとしない人はいないはず。	1	6	0-
	2. オーボエに導かれて音楽はやや急迫する。ホルンが入るとテンポもかなり上がって、悲しい激情があふれ出す。	3	5	5-
	3. 1がチェロに戻り、ヴィオラ、ヴァイオリンに受け継がれると、神が地上の悲しみを慰めるように、慈愛の度を深めていく。次いで木管トップ奏者によるユニゾンの歌は天上の響き。	2	5	8-
	4. 2と同じ急迫の場面。トランペットの悲歌に導かれ、今回の急迫の主は弦楽器群。マーラーらしい嘆き節が堪能できる。金管のファンファーレ、ホルンの咆哮を経て、再び沈静する。	4	5	14-
	5. 悲しさが大きいほど、慰めも大きい。再び戻った1はヴァイオリンから始まり、木管、金管も加わって、大きく感動的なうねりを見せる。しかし2の急迫がまたも現れ、音楽はかつてないカオスに。	5	5	16-
	6. 不毛の大地に、寂寥としたフルート。しかし金管の清澄なコラールで1が戻ると、ついに太陽が昇ってくる。	1	5	19-
	7. 全オケがゆっくりと盛り上がっていき、いよいよフィナーレ。ティンパニ2名のD・A音連打に乗って二長調の主和音が輝かしく鳴り響き、「愛」の最終的な到達点へ。	5	6	22-

5. ニーチェと民謡詩 —対照的な2つの歌詞

第4楽章の歌詞は、ドイツの哲学者ニーチェの思想を代表する著作『ツアラトウストラはこう語った』（全4部）（1885年）の、最も重要な一節からとられています。

『ツアラトウストラはこう語った』といえば、リヒャルト・シュトラウスの同名の交響詩があまりにも有名ですが、マーラーも同じ題材から曲をつくっていたわけです。作曲年代も同じで（ともに1896年）、ニーチェが当時の知識層に与えた刺激の大きさがうかがわれます。

「Oh Mensch! Gib Acht! (人間よ、心せよ。)」から始まるこの一節は、第3部のラストに近い『第二の舞踏歌』に現れます。ツアラトウストラが「永劫回帰」の本質に触れ、それを真に獲得することと自らの生とが決して両立しないことを悟ってさめざめと泣く部分、生との別れを告げる鐘が1回また1回と響くごとに、この一節が1句ずつ刻印されるのです^{*4}。

第5楽章の歌詞は、ドイツ各地に古くから伝わる民謡を、ブレンターノとアルニムという2人の文学者が蒐集してまとめた詩集『子どもの魔法の角笛』（1808年）からとられています。

この民謡詩集は、村の生活、若者のせつない恋心、尼さんや僧侶、さらには無法者の暮らしぶりなど、一般人の飾り気のない感情を生き生きと伝えていて、『グリム童話』とともにドイツ疾風怒濤シュトルム・ウント・ドラング時代の大きな成果とされています。

マーラーはしばしば交響曲の中に『子どもの魔法の角笛』の詩に曲をつけたものを織り込んでおり、『マラ3』のほかに、交響曲第2番、第4番にも取り入れています（このため、交響曲第2～4番を『角笛交響曲』と括ることがあります）。さらにマーラーはこれに飽き足らず、十数編の詩を選んで同名の歌曲集までつくっており、この民謡詩集の素朴な世界にかなり入れ込んでいたようです。

超人ニーチェが（キリスト教を拒絶し）「人間」として耽った深遠な思索と、一般人が素朴に期待する（キリスト教的な）「天使」の救済。マーラーは対照的なこの2つの世界に人間界の営みを代表させ、第1～第3楽章で完成した自然界の営みの「進化論的發展」として配置しました。

そして、ついに、第6楽章で「進化論的發展」の最終形態が明らかになります。

6. 神様の再降臨なるか!? 水響渾身の第6楽章

「私はこの楽章が『神が私に語ること』と呼ばれてもよいと思います。神がただ愛としてのみ理解されるという意味においてです。こうして、私の作品は、段階的な上昇で発展していく、あらゆる段階を含む音楽的な詩となっているのです。それは生命のない自然で始まり、神の愛まで高められていきます」（マーラー）

すなわち、「愛」＝「神」。

水響は17年前の1993年5月に、『マラ3』を演奏しています。筆者はまだ社会人何年めかの若造で、今日と同じ楽器の同じパートで舞台上に乗っていました。当時はとくに深く考えることもなく楽譜をこなしていたというのが正直なところですが、合唱のけがれのない声がフェードアウトして第5楽章が終わり、弦楽器の深い響きで第6楽章が始まったとき（自分は管楽器なので、音を出していないのですが）、思わず全身が脱力し、ふーっと大きく息を吐いたことを今でも鮮明に覚えています。約25分の演奏時間が、とてつもなく長かったようにも、ほんの一瞬のうちに過ぎ去ったようにも感じられました。最後の二長調主和音のロングトーンでは、身体の中で、ほっぺたからお腹のあたりまで、しあわせな温かい液体が満ちて膨らんでくるような感覚があり、身体の外では、自分たちの意思とは無関係に、音がホールに充溢しているような感覚がありました。

——「神様が降りてきた」という感覚を、もてたのかもしれません。

マーラーは楽譜の最後、この二長調主和音の部分に「Nicht mit roher Kraft. Gesättigten, edlen Ton. (乱暴になることなく。満ち足りた、至高の音。)」と指示しています。これが、神様を降臨させるための、プレーヤーに向けたマーラーの具体的指示です。17年の星霜を経て、筆者のような古株団員から、筆者が社会人となった頃に生を受けた新しい団員まで、全員が一体となり、再び神様を降ろして、くることができるよう、この指示をかみしめながら最後の音を伸ばしたいと思います。

【第4楽章】

『ツアラトゥストラはこう語った
(Also sprach Zarathustra)』より

ニーチェの思想は極めて深遠であり、この書物のスタイル自体も、理論的な哲学の説明書ではなく、暗示的・寓話的な物語調をとっています。したがって、下の一節も、一読して意味がわかるような明快なものではありません。ここではなんとなく雰囲気を感じ取ればそれでよいと思います。

Oh Mensch ! Gib Acht !

人間よ、心せよ。

Was spricht die tiefe Mitternacht ?

深い真夜中は、何を語るのか。

“ Ich schlief, Ich schlief — ,

「私は眠っていた、私は眠っていた。

Aus tiefem Traum bin ich erwacht : —

深い夢から、私は目覚めた。

Die Welt ist tief ,

世界は深い、

Und tiefer als Tag gedacht .

昼間が考えたよりも深い。

Tief ist ihr Weh — ,

世界の苦痛は深い。

Lust — tiefer noch als Herzeleid :

快楽は、一心の悩みよりもさらに深い。

Weh spricht : Vergeh !

苦痛は語る、立ち去れと。

Doch alle Lust will Ewigkeit — ,

しかし一切の快楽は永遠を欲する、

— will tiefe, tiefe Ewigkeit ! ”

深い深い永遠を欲する」

【第5楽章】

『子どもの魔法の角笛 (Des Knaben Wunderhorn)』より

こちらは平易です。前口上と締めくりに挟まれて、エピソード(点線内)が語られます。ペテロはアルト独唱、イエスは女声合唱によって歌われます。

「ビン、バン」というのは鐘の音の横写で、児童合唱によって(のちに女声合唱も加わる)終始繰り返されます。

Bimm, Bamm, …

ビン、バン、…

Es sungen drei Engel einen süßen Gesang; mit Freuden es selig in den Himmel klang.

3人の天使がかわいらしい歌を歌い、その歌は喜びにあふれて天上に響きわたった。

sie jauchzten fröhlich auch dabei, daß Petrus sei von Sünden frei.

天使たちは歌いながら歓喜の声を上げた、「ペテロの罪が許された!」と。

Und als der Herr Jesus zu Tische saß, mit seinen zwölf Jüngern das Abendmahl aß:

イエス様が12人の使徒とともに食卓につき、晚餐をとられたときのこと、

Da sprach der Herr Jesus, “ Was stehst du denn hier ? Wenn ich dich anseh', so weinest du mir ! ”

イエス様は言われた、「そこのお前、いったいどうしたのだ? よくよく見ると、泣いているようにみえるが」と。

“ Und sollt' ich nicht weinen, du gütiger Gott ? Ich hab' übertreten die zehn Gebot. Ich gehe und weine ja bitterlich. ”

〔ペテロ〕「慈しみ深い神様、これが泣かずにおられましようか? 私は十戒を破ったのです。私はここを出て、思いきり泣きたいのです」

(Du sollst ja nicht weinen ! Sollst ja nicht weinen !)

〔合いの手〕(泣いてはいけない! 泣いてはいけない!)

“ Ach komm und erbarme dich über mich ! ”

〔ペテロ〕「どうか来て、私を憐れんでください」

“ Hast du denn übertreten die zehn Gebot, so fall auf die Knie und bete zu Gott ! Liebe nur Gott in alle Zeit ! So wirst du erlangen die himmlische Freud' . ”

〔イエス〕「お前が十戒を破ったというなら、ひざまずいて神に祈りなさい。どんなときも、ひたすら神を愛しなさい。そうすれば、天上の喜びがお前にもたらされる」

Die himmlische Freud' ist eine selige Stadt, die himmlische Freud', die kein Ende mehr hat !

天上の喜びは至福の都。天上の喜びは終わることがない。

Die himmlische Freude war Petro bereit't, durch Jesum und Allen zur Seligkeit.

天上の喜びはイエス様によって与えられた。ペテロと、そしてすべての人を幸福に導くために。

(横地 篤志 (歌詞の日本語訳も))

※1 アルプス山脈の東端、オーストリア中部ザルツカンマーゲート地方にあり、避暑地として有名。マーラーはここに作曲小屋をかまえ、演奏会がオフになる夏になると(当時マーラーはハンブルク市立歌劇場の指揮者だった)やって来て、作曲に集中した。

※2 ディオニュソスとは、ギリシャ神話で破壊と創造の神であり、また豊穡と酒の神でもある。ローマ神話ではバックスがこれにあたる。

※3 牧神とは、ギリシャ神話のパン。ローマ神話ではファウヌス。山野と牧畜をつかさどる半人半獣の神。

※4 しかし「永劫回帰」の虚無は、第4部において、「永劫回帰」そのものを直視して肯定することにより超克される。「ツアラトゥストラは黙した。私の時がやって来た。これが私の朝だ。私の一日が始まる。いまこそ上がって来い、上がって来い、おまえ、大いなる正午よ」。この「永劫回帰」の積極的な肯定に至るプロセスの途上で、再び、この一節の1句1句が薄く滲みながらリフレインされる場面がある(第4部『夜の彷徨い人の歌(醉歌)』～『徴』)。

私の『マーラー 3 番』

「闇にさす光」を思い浮かべて歌います

3 番を歌うのは初めてです。これで、女声独唱付きのマーラーの交響曲は全て歌ったことになるので感慨深いですね。

曲に接してみると、「若いな」と感じるけど、前回歌った「大地の歌」に通じる幽玄の世界も感じます。30 歳代と晩年の 40 歳台後半と作曲時期は異なりますが、**生と死の境目**といった作品に流れるものは同じなんだと思いました。初めて水響と合わせた時は、マーラーが細胞にしみわたっていくように感じられて、とても幸せでしたよ。

歌う時に思い浮かべるのは、「闇にさす光」かなあ。人生のいい時期にあっても、マーラーって何かに追われ、何かに襲われるのではという恐怖心に付きまといわれていたような気がする。ただ、この曲に取り組んでいた時は、これからきっとよくなるとか、いつかくる幸せ、人生の勝利を予感していたように思います。皆さんも、**前向きなもの**を感じ取って欲しいですね。

(小川明子 アルト独唱)

「第 6 楽章冒頭」に尽きます！

バイオリン奏者の私としては、このテーマの答えは「第 6 楽章冒頭」に尽きますね。バイオリンは 1 つ前の第 5 楽章はお休みしてます。第 5 楽章が無邪気で素朴な子供の世界の音楽とすれば、この第 6 楽章は悟りを開いたようなとても落ち着いた**大人の世界の音楽**です。5 楽章の休みがあるからこそ、6 楽章の冒頭のバイオリンの美しいことこの上ない旋律を存分に効果的に聞かせることができるのでしょう。(前田 啓)

マラ 3 生活

日曜日、練習から帰宅、5 楽章の『天使の歌声』を聴きながら眠りにつき、翌日の出勤のテーマは『マーチ風』1 楽章、週末の黄昏は 6 楽章の『天国への階段』…等と想像(妄想?)しながら、マーラー 3 番と付き合っております。皆さんも、本日の水星のマラ 3 で「昇天」請合い！(井上 拓)

27 年目の幸せ！

私にとって最初のマーラーが 3 番。中二の冬に LP でこの大曲に触れ、「夏の足音」に慄き、「愛」の歌に圧倒されたことを昨日のこのように想い出します。以後 26 年間で生で聴くこと 12 回(前回の水響の 3 番も客席で聴きました。正直羨ましかった)、**出会い**

から 27 年を経て、ようやく自分もこの曲の舞台に乗れます。ああ、何という幸せ！

(セミ・プロ・ステマネ @ 本日は舞台上)

作曲小屋でマーラーに浸りきる

マーラーが交響曲第 3 番を作曲した**作曲小屋**が、オーストリアのアッター湖畔に残っています。水響での前回の交響曲第 3 番の公演から数年後、その作曲小屋を訪ねました。



それは文字通りの小さな「小屋」で、美しい自然に囲まれていました。



中にはピアノが 1 台。浸りきる私でした。

(Vn とくち)

「今回は、佐藤君で」…うっそ～！

2009 年 7 月 19 日、水響合奏後に国立駅そばのアイスタジオで行われたオーディションで、私はマラ 3 の**トロンボーン**の 1 番を獲得したのだ。

嗚呼マーラー、3 番、マーラーの 3 番「**我らは堅固な校舎を建てた**」なる学生歌を主題に始まるこの長大な交響曲は、二十うん年前の学生時代、確かに**夢の交響曲**だった。

NHK 教育で放送されたバーンスタインの演奏をモノラルで撮ったビデオを繰り返し鑑賞し涙していたあの頃。まだ BS 放送が始まったばかりでサロネンが N 響に客演したのを実演には行けず学寮にただ 1 台導入された BS チューナーで見た(あの素晴らしい 3 楽章!!)あの頃、3 番は夢の交響曲だったのである。

マーラーの 3 番のソロパートは上吹きトロンボーン奏者にとっては**一生に一度は吹きたい**パートだ。

オーディション以来、交通事故にも・脳卒中や心不全などの突然死にも合わないように、また暗い夜道でおやぢ狩りに合わないように、注意しつつ本番に備える毎日である。(さと一)

P.S.

もっともっと詳しい私のマラへの思いは、こちらから↓

http://www.assist_f.org/suikyoma3.doc

オルフ祝祭合唱団

◇ソプラノ1

大口 ひろみ
佐枝 陽子
鈴木 祐子
武田 光子
古田 はつみ
山田 和子

◇ソプラノ2

岩井 純子
金友 浩美
柴田 裕子
鈴木 さや子

◇メゾソプラノ1

井内 万里
岩根 桂子
内田 純子
小柴 裕子
佐久間 美和子
古畑 恵子
牧田 寿賀子

◇メゾソプラノ2

朝日 明日香
久保 季三江
佐藤 江美子

城村 聡子
末續 淑子
中谷 久子
松藤 寛子
村上 智美

◇アルト1

近江 栄子
大牟田 直子
大森 榮子
GANCO。
木下 智美
高橋 麗美

西村 くれは
柳 奈津代
渡辺 悦子

◇アルト2

大脇 依保子
黒岩 美加沙
鈴木 靖子
栩木 愛
根本 澄子
藤中 由紀子
森 知恵子
山上 千枝

◇合唱指導

小野 真実子

すみだ少年少女合唱団

◇ソプラノ

浅野 優花
安住 紗穂里
居城 奈南
伊藤 美穂
大本 彩加
岡村 実緒
長田 逸希
小関 詩織
小関 未玖
川内 萌恵
小池 李茉
小林 珠緒
齋藤 江利子

佐藤 ひかり
柴田 京佳
菅澤 優貴
菅原 杏実
鈴木 健太
鈴木 里奈
高梨 優希
富田 海月
富田 海友
長濱 直哉
中川 花奈
春山 麻美
藤井 眞琴
星谷 尚志

松本 ありさ
松本 まりや
望月 誠人
望月 優希
森谷 真菜実
山本 星玲菜
山本 瑠菜
吉田 有沙

◇アルト

池田 麻友
池田 佑香
岩渕 咲希
岩渕 真実

小関 聖士
小野 真寿美
河内 春香
後藤 万里
坂井 美樹
高師 愛佳
高師 衣里子
高師 沙耶佳
高橋 花奈
高橋 伶奈
竹内 智美
照井 涼太
天坂 優穂
中山 玲弥

野田 晶子
萩原 愛紗
福田 ちひろ
藤田 華乃
三岳 由実
南 聡実
武藤 結
望月 翔太
山田 亜由美
渡邊 優子

◇合唱指導

甲田 潤



水星交響楽団

◇指揮者

齊藤 栄一

◇コンサートマスター

米嶋 龍昌

◇第1バイオリン

生駒 陽子

上村 剛正

岡田 紳太郎

國宗 洋子

篠木 悠介

鈴木 尚志

鈴木 美沙

高橋 廣

徳地 伸保

豊田 由起

中里 咲子

宮川 妙子

宮川 雅裕

山内 啓

祐源 蘭

米嶋 龍昌

◇第2バイオリン

岩田 遥

岡田 聖夏

川原 ひかり

黒川 夏実

小林 美佳

小山 吉智

佐々木 晶子

菅原 利枝

祐成 秀樹

高尾 麻衣子

滝澤 蘭

土屋 和隆

西沢 洋

野村 国康

前田 啓

吉野 直樹

◇ビオラ

有井 晶

井上 拓

太田 文二

川俣 英男

木村 納

金 純子

小松 聡

藤岡 洋平

松本 祥世

三上 さやか

諸橋 遼一

柳沢 成俊

◇チェロ

伊澤 雅子

今村 文子

岩下 藍

北岡 正英

首藤 ひかり

田代 愛

橘 温子

東郷 丞

中山 憲一

日吉 実緒

◇コントラバス

大西 功

刈田 淳司

北島 麻由

小池 講師

高橋 真弓

長屋 裕大

西永 章彦

福原 祥公

増渕 斑夫

◇フルート

川崎 裕恵

西村 かよ子

村上 芳明

横田 慎吾

◇オーボエ

浅井 千栄子

斎藤 暁彦

野口 秀樹

山下 芙由子

◇クラリネット

浅井 昭成

賀内 洋介

西村 伸吾

樋浦 裕子

横地 篤志

◇ファゴット

土屋 友紀

富井 一夫

長谷川 美奈

土方 明

◇ホルン

伊集院 正宗

井上 清駿

岡田 和樹

岡本 真哉

桑名 久美

島 啓

梁川 祥子

梁川 真吾

山形 尚世

◇トランペット

家田 恭介

岩瀬 世彦

金子 恭江

桜井 新

田玉 詩織

◇トロンボーン

小笠原 剛

櫻井 統

佐々木 英王

佐藤 幸宏

◇チューバ

植松 隆治

◇ハープ

東森 真紀子

矢澤 みさ子

◇パーカッション

鈴木 海里

高橋 淳

椿 康太郎

野川 真木子

原島 のぞみ

向 愛佳

山本 勲

渡辺 麻子

第44回定期演奏会

2010年9月20日(月・祝) 13:30 開演 すみだトリフォニー大ホール

オールプロコフィエフプログラム

交響曲第7番、ヴァイオリン協奏曲第1番(ヴァイオリン独奏: 田野倉雅秋)

バレエ音楽「ロメオとジュリエット」抜粋

第45回定期演奏会

2011年5月1日(日) 13:30 開演予定 ミューザ川崎シンフォニーホール

第46回定期演奏会

2011年9月19日(月・祝) 13:30 開演予定 すみだトリフォニーホール